

〈學術論文〉

『奥細道菅菰抄』と漢詩文（二）

塚越義幸

1 『奥細道菅菰抄』と漢詩文（2）

引き続き『奥細道菅菰抄』と漢詩文との関わりについて考察してみたい。

（七）前途三千里のおもひ

此五文字ハ、必^ズ詩文中ノ一句ナルベシ。出書未^レ考。或ハ古文前集ニ、此ヲ去^テ三千里、ト云意カ。前ハス、

ムと訓ズ。途ハミチニテ、前途ハ行ク先キト云^フナリ。

この注では、「此五文字ハ」とあるように「前途三千里」という語句が、詩文中に用いられていると解説をし、その五文字の出典は判明しないとしつつも、『古文前集』にある「此ヲ去テ三千里」の意味を踏まえたかと述べている。この『古文前集』（引用書目に

ある)にある作品とは、李白の七言古詩「思邊」である。全句挙げてみる。

去歲何時君別妾 去歲何れの時ぞ 君妾に別れし
 南園綠艸飛蝴蝶 南園綠草 蝴蝶飛ぶ
 今年何時妾憶君 今年何れの時ぞ 妾君を憶ふ
 西山白雪暗秦雲 西山の白雲 秦雲暗し
 玉關去此三千里 玉関此を去りて三千里
 欲寄音書那可聞 音書を寄んと欲す

那んぞ聞くべけん (1)

この詩は題名に「辺を思ふ」とあるように、妻が辺境地にいる夫のことを思つて詠んだものである。夫の滞在地「玉関(玉門関)」は、ここから「三千里」も離れているので、音信が届かないことを妻が嘆いている。

ここで李白の詩の一句を引用したのは、単に「三千里」の用例を挙げたに過ぎないと思われる。しかし、「予」がこれから何時帰れるかわからない「おくのほそ道」の旅に立出するに当たり、胸の詰まる思いをしてた状態と、遙か遠い未知の世界にいる夫を思う妻の気持ちとを、梨一が重ね合わせて共感させようとしていたとも考えられる。

なおこの注は『鈔』には採られていない。また、『菅菰抄』を踏まえつつ頭注を施した『鼈頭奥之細道』(以下『鼈頭本』)には、

前途 ゼンドハ 行先を云。古文前集ニ、此ヲ去テ三千里トアリ。
 とある。(2)

(八) 行春や鳥啼^キ魚の目ハ泪

杜甫^ガ春望^ノ詩ニ、感^{シテ}時^ヲ花^モ濺^レ涙^ヲ、恨^テ別^レ鳥^モ驚^カ心^ヲ。文選古詩ニ、王鮪^ニ懷^ヒ河岫^一、晨風^ニ思^フ北林^ヲ。古樂府ニ、枯魚過^レ河^ヲ泣^ク、何^ノ時^カ還^テ復^ク入^シ。是等を趣向の句なるべし。

是を矢立の初としての段

この注では、「予」が旅立ちに当たり、これから三千里にもわたる辺土の旅のことを考え(前出)感極まって、幻の住み処とも言えるこの江戸の町に別れを惜しむ涙を流し、その感慨を詠んだ句「行く春や……」に対し、趣向を与えたと思われる句として漢詩が三首挙げられている。

まず杜甫の「春望」(引用書目に『杜詩全集』とあるが、

具体的にどの全集を示しているかは不明だが、梨一が杜甫の詩集を見ていたことは確実であろう) については、他の注釈でも取り上げられているので、今更解説の余地はないと思うが、この二句には涙と鳥は登場するが、肝心の魚は出て来ない。尾形仍氏も『おくのほそ道評釈』(角川書店)の中で、「ぴつたりと該当するものではない」とされている通りで、今ひとつしっくり来ない。ただ杜甫の詩句は、鳥や花のような日常的な事象が、有事には特別な感慨で捉えられてしまうということからすれば、芭蕉も旅立ちという非日常の特別な状況の中、普段気づかない鳥の声、魚の目に関心が向けられたと言うことでは共通する境地なのかもしれない。そこに注釈に挙げた意義を見い出すことはできよう。

次に『文選』(引用書目にある)の古詩については、卷三十の雜擬上擬古詩十二首の陸機「擬行行重行行」の七句目八句目である。全句を挙げてみる。
悠悠行邁遠 悠悠として 行き邁きて遠し
戚戚憂思深 戚々として 憂思深し
此思亦何思 此の思ひ 亦た何をか思ん

| | |
|-------|---------------------------------|
| 思君徽與音 | 君が徽と音を思ふ |
| 音徽日夜離 | 音徽 日に夜に離る |
| 緬邈若飛沈 | 緬邈たること 飛沈の若し |
| 王鮪懷河岫 | 王鮪 河岫を懐ひ |
| 晨風思北林 | 晨風 北林を思ふ |
| 遊子眇天末 | 遊子 天末に眇かなり |
| 遠期不可尋 | 遠期 尋ぬべからず |
| 驚飄褰反信 | 驚飄 信を返すに褰(た)つ |
| 歸雲難寄音 | 歸雲 音を寄せ難し |
| 佇立想萬里 | 佇立して万里を想ふ |
| 沈憂萃我心 | 沈憂 我が心に萃まる |
| 攬衣有餘帶 | 衣を攬(と)りて 余帶有り |
| 循形不盈衿 | 形を循るに衿(ころも)のたごにも盈たず |
| 去去遺情累 | 去り去りて 情累を遺つ |
| 安處撫清琴 | 安處(しずかなるところ) 清琴を撫つ ^③ |

この詩は、古詩十九首の「行行重行行」になぞらえたもので、女性が遠征をしている男性を思う内容である。いくら思っても遠距離恋愛、気持ちに限界が生じてしまう。その慰めに琴を奏しようという結末である。引用された二句は、「王鮪すなわちチヨウザメがかつて

住んでいた川の穴を思い出し、晨風つまりハヤブサはねぐらのある北の林を慕う」という意味で、故郷を思うことの例示として挙げられているに過ぎない。ここでは魚も鳥も古巣を思うものだから、芭蕉も旅立ちに当たって出発地江戸を思うであろうと言うことなのだろうか。

さらに「古楽府」(該当する引用書目は見当たらない⁽⁴⁾)については、「干物になってしまった魚が、生まれた川を船(荷物として)で渡って泣いた。もう二度とこの川には戻れない」という意味である。これは「魚の涙」の用例ではあるが、元泳いでいた川との離別の涙である点は共通しているかもしれない。

最後に「弥生も末の七日」からこの「行く春や……」の句までを「是を矢立の初としての段」というふうに段分けをしている。章立てでは『菅菰抄』の特徴である。

『鈔』では「春望」は引用しているが、他の詩句は採っていない。『鼈頭本』では、

鳥啼魚の目八泪 杜甫カ詩、文選古詩、古楽府二
枯魚過河泣ク何時還復入。

とある。

(九) 呉天に白髪のを重ぬといへども

禪則ニ、笠^ハ重^シ 呉天^ノ雪、履^ハ芳^シ 楚地^ノ花、ト云句アリ。白髪ヲ雪ニ喩ル^レハ、和漢ニ例多シ。○

按ルニ、此呉ハ、或ハ五ノ字ノ誤カ。五天ハ五天竺云。三體詩ニ、五天到^{ラン} 日頭應^レ 白^{カル}、ト乃^チ此意ナリ。

ここの注では、「予」は「呉天に白髪のを重ぬるほど」の年齢ではあるが、奥羽行脚を思い立ってしまったという場面の特に「呉天」について、「禪則」と「三體詩」(引用書目にある)の用例を挙げて解説している。

まず、「禪則」であるが、この用例は『禪林句集』(句双紙)に、この二句のみが取られており、それを指すか。この二句は、今でも諸注釈の中で多く採用されているもので、出典としては『禪林句集』とされるが、『菅菰抄』の引用書目には立項されていない。ただここでは、注にあるように白髪を雪に喩える用例として挙げられていることがわかる。しかも「呉天雪」とあるので、芭蕉がこの句に基づいて、あえて雪の文字を

白髪と置き換えたであろうことが想像できる。しかし、梨一は、「呉天」は「五天」の誤りで「五天竺」を指すのではないかと述べ、反論例として『三体詩』の用例を挙げた。この詩は李洞の七言絶句『送三藏師西域』の転句である。全句挙げてみる。

十萬里程多少難 十万里程 多少の難

沙中彈舌授降龍 沙中に舌を弾じて 降竜に授く

五天到日頭應白 五天到らん日 頭へ白るべし

月落長安半夜鐘 月は落つ 長安半夜の鐘⁽⁵⁾

三藏法師が十万里の道のりの困難を乗り越え、五天竺にたどり着くころには、頭は真っ白になっているだろうと。承句の砂漠の中でお経を竜に聴かせる故事は、玄奘三蔵のことである。「五天」は素隱の注では「東天竺、西天竺、南天竺、北天竺、中天竺トテ五ノ天竺アルゾ」とあり、襄庾の増註では「五天則チ天竺ノ之五印度、謂フ東西南北中之五印度也」とある。⁽⁶⁾ここで梨一は『禪林句集』の用例を引きつつも、その「呉天」を「五天」の誤りではないかと想定し、李洞の詩の五天竺を指し白髪になってしまった三藏法師の困難を長途の旅の苦しみに、「五天の白髪の恨」と捉え

るべき点を提言した。なかなか興味深い指摘である。

ここでは芭蕉の誤りではとの想定、というより版本の本文の誤りを指摘したと考えるべきだが、もし梨一の指摘通りだとすると、李洞の詩句は「予」の旅観に通ずる典拠となり得るであろう。⁽⁷⁾

これらの注は、『鈔』では、『禪林句集』の用例のみ引用している。一方『鼈頭本』では、

○白髪を雪にたとえたる例古詩に多し。禪則に、
笠ハ重呉天ノ雪。履ハ芳楚地ノ花。

となっている。

(十) 剛毅木訥の仁にちかきたぐひ

論語二、剛毅木訥近仁ニ、トアリ。剛毅ハ、気象ノジャウブナルナリ。木ハ樸ト通ジテ、ツクロヒカザラヌヲ云。訥ハ言語ノ無調法ナル⁽¹⁾ニテ、何レモ律儀者ノサマナリ。

ここでの注は、「予」が日光山の麓に泊まった宿の主人仏五左衛門の姿を表現した「剛毅木訥の仁にちかきたぐひ」の出典および語釈を施したものである。出典は言わずもがな『論語』(引用書目にある)子路篇

である。語釈としては、「剛毅」を氣質が堅固なことと「木」を素朴で飾らないことと「訥」を言葉が不器用とし、総括して律儀者と解釈した。

この注は、『鈔』でも採られている。また『鼈頭本』では、

○剛毅　ゴウキ　○木訥　ボクトツ　論語ニ出タリ。

とごく簡単に示している。

(十一) 氣稟の清質

氣稟ハ朱熹大學ノ序ニ其氣質ノ稟、トアリ。人生レ付テ稟ケ得タル氣象ヲ云。清質ハ潔白ナルカタギナリ。

卯月朔日の段

ここでの注は、(十)の続きで、仏五左衛門の性格を述べた「氣稟の清質」の語釈である。まず「氣稟」の語釈として、朱熹の『大学章句』序(引用書目にある)を挙げている。その箇所の前を示すと、

蓋自_三天降_二生民_一則既_二莫_レ不_三與_レ之_二以_二仁義禮智之性_一矣。然_レ其氣質ノ之稟或_レ不能_レ齊_一、

是_ヲ以_レ不能_レ皆有_中以_知其性ノ之所_レ有_{スル}而全_{スル}之_ヲ也。(8)

となる。朱熹は、天が人民にこの世の中に生きる機会を与えた折に、仁義礼智の本性を備わらせたが、その生まれつき与えられた氣質は人により異なる。だから自分の本性が何かを理解してそれを全うすることができないのだとする。梨一はここでの「氣質の稟」を「氣稟」の典故と考え、「人々が生まれながらに受け入れ備わった氣象(氣質)」と解釈している。また「清質」は「潔白な氣質」との語釈を試みている。

また梨一は「卅日、日光山の麓に泊まる」からこまでを、「卯月朔日の段」と名付けている。

この注は、『鈔』には採られていない。一方『鼈頭本』では、

○氣稟　キリン　朱熹大學ノ序ニ出ル。○清質　セイシツ　潔白なる事也。

と簡潔ながら、出典も明記している。

(十二) 恩澤八荒にあふれ

恩澤ハ、卑俗ノヲカゲト云_一ニテ、慈恩ノウル

ヲヒヲ云。八荒ノ文字ハ、山海經、神異經、淮南子等ニ出テ、荒ハ遠方ヲサス。八荒ハ四方隅ノ俗ニ八遠處ナリ。

この注では、日光山參詣の場面で、その恩恵が天下の隅々まで浸透していることを述べた「恩沢八荒」の語釈を施している。「恩沢」は世俗における恩恵という

ことで、その恩恵が潤い広がっている様をいうとある。「八荒」は、その熟語の用例が『山海經』や『神異經』・『淮南子』などに見られるとあり、意味は四方

四隅の遠い所としている。しかし、今回の調査では『神異經』にはその用例は見つからなかった。『山海經』には「以テ周ニ歴シ八荒ヲ」(郭璞「注山海經序」とあり、

(穆王が)世界の八方の果てを周遊したことが記されている。また『淮南子』卷二十泰族訓には、

又況^{シヤ}登^ニ太山^ニ、履^テ石封^ヲ、以望^ニ八荒^ヲ、視^ニ天都^ノ若^ク蓋^ノ、江河^ノ若^ク帶^ノ、又況^{シヤ}萬物^在其間^ニ者^ヲ乎。其^ノ爲^レ樂、豈不^レ大^{ナラ}哉。⁽⁹⁾

とある。人生の中で不可欠なのは衣食であるが、暗室で食事をしたり衣服を整えたりしても楽しむことはできず、やはり日光月光が必要である。戸を開けて外を

眺めたり、外に出て日光月光に当たれば気分も晴れる。ましてや「太山に登つて、石の壇の上に立ち、八荒つまり遠方の隅々まで展望してみれば、帝都もかさのようで、大河も帯のようで、すべての物がその間に見える。その楽しみたるや計り知れない」という内容である。

この注は、『鈔』には採られていない。「八荒」については「孟子」万章上篇を挙げている。一方『鼈頭本』では、

○恩澤 オンタク 俗のおかげと云事ニテ、慈恩のうるほひを云。
○八荒 ハツコウ 山海經 神異經 淮南子ニ出テ、荒ハ遠方をさす。四方八方と云事也。

と「八荒」では、出典はそのまま掲載しつつも、四方八方という語に置き換えている。

(十三) 四民安堵の栖隱なり
四民ハ、士農工商ヲ云。前漢書食貨志ニ見

タリ……
この注では、(十二)に引き続き、日光山の恩恵

により四民が穏やかに暮らせているという場面での「四民」の語釈が施されている。梨一は「四民」を明確に「士農工商」のことであると注解し、その用例として『漢書』（引用書目にある）食貨志を挙げている。しかし、具体的な箇所は示していない。その箇所は、食貨志第四上に、

聖王域カキルニ民ヲ、築ニ城郭ヲ以テ居シメ之、制ニ廬井ヲ以テ均シ之、開ニ市肆ヲ以テ通シ之、設ニ庠序ヲ以テ教フ之。士農工商ノ四民有リ業學テ以テ居ラ位ニ曰レ士ト、鬪レキ土ヲ殖ルヲ穀曰レ農ト、作レ巧器曰レ工ト、通シ財ヲ鬻ラ貨ヲ曰レ商ト。聖王量テ能ラ授レ事ヲ、四民陳レ力ヲ受レ職ヲ。故ニ朝ニ亡ク廢官一、邑ニ亡ク救民一、地ニ亡ク曠土一。⁽¹⁰⁾

とある所が該当すると思われる。

聖王が民を城郭を築いて、そこに住ませ井田制を用いて平均化し、市場と店を開いて生産物を流通させ、学校を設けて教育をした。士農工商である四民には、それぞれ家業というものがある。士は学を修め地位を築き、農は土地を開墾し農作物の生産を増やし、工は技巧を用いて器物を作り、

商は財貨を流通させる。それら四民に対し、聖王は能力に応じて仕事を授け、四民はそれに酬いるべく力量を発揮してその職を受ける。このために朝廷には廢れた官職もなく、村には怠惰な民はおらず、土地も荒れたところはない。

という内容である。まさに聖王の優れた政策により、四民（士農工商）が安堵している状況を述べている。梨一はこのような史実から、四民を士農工商と意味づけ、安堵の栖と結びつけたのであろう。

この注は、『鈔』には採られていない。一方『鼈頭本』では、

○四民 シミン 士農工商を云。
と出典は示さず、簡潔に示している。

(十四) 薪水の勞をたすく

晉書、陶淵明傳ニ云、陶潛爲ニ彭澤ノ令ト、不下以ニテ家累ヲ自ラ隨ヘ、送リ一力ヲ給ニ其ノ子ニ曰、遣ニ此ノ力ヲ助ニ汝ガ薪水之勞ト。力ハ僕ヲ云。薪水トハ朝夕ノ飲食等ノナリ。

この注では、黒髮山の章で、同行人曾良の紹介を

した中で、彼が「予」の「薪水の労をたすけた」と表したその「薪水の労」の出典『晉書』（引用書目にある）陶淵明伝を示した。しかし該当部分は『晉書』陶潜伝には見られない。しかし梁の照明太子の「陶淵明傳」には、以下のようにある。

後^ニ爲^ル鎮軍建威參軍ト、謂^テ親朋^ニ曰、聊^カ欲^ス絃歌^{シテ}以^テ爲^ニ三徑ノ之資ト可^{ナラ}ク^ハ乎。執事ノ者、聞^レ之^ヲ、以^テ爲^ニ彭澤ノ令ト。不^ニ以^テ家累^ヲ自隨^ヘ、送^テ一力^ヲ給^ニ其子^ニ、書^ニ曰、汝^チ旦夕^ノ之費^ハ、自給^{スル}爲^ス難^{シト}。今遣^ニ此力^ヲ助^ニ汝薪水^ノ之勞^ヲ。此^レモ亦人ノ子^{ナリ}也。可^シ善^ク遇^フ之^ヲ。(11)

後に鎮軍や建威參軍になった陶淵明であったが、彼は友人に向かって「こんな役職より、琴瑟に合わせて歌を歌い、あぜ道を歩いて田舎暮らしをするための準備でもしたいものだが、どうだろうか」と言うと、当局は彼を彭沢の県令に任命したという。その任に当たり、妻子は足手まといだとして单身赴任をし、家族のために下僕一人を送り、子どもに手紙で「朝夕の家事を自分でこなすのは大変だろうから、下僕を送っておまえの身の回りの世話をさせることにした。でもこの下僕

も人の子であるから、やさしく扱ってやってくれ」と下僕への心遣いを示した。

陶淵明の人となりを窺わせる田園詩人らしいエピソードである。この伝は前述の通り『晉書』には見られないが、後の陶淵明集の中に、同じく照明太子の序文と共に採られており、かなり流布していたようである。梨一はこちらを見て『晉書』の伝と勘違いしたのだろうか。しかも『晉書』は陶潜伝であつて陶淵明伝ではなく、そのあたりも混同していたのかもしれない。さらに引用した本文も遺漏があり不正確で、原典を確認せずに出典をあげた可能性も高い。

ただ出典の混同はあるものの、注の中で引用した陶淵明伝の語の「力」や「薪水」の意味を示しているのは興味深い。

この注は、『鈔』には採られていない。一方『鼈頭本』では、

○薪水 シンスイ 晉書陶淵明力傳二梓（詳の誤りか）し。

と出典（誤りか）まで明記している。

(十五) 暫時八滝に籠るや夏の初

夏ハ、モト結夏ト云、略シテ夏トス。僧家ニ籠リ居テ、修行スル時ノ名ナリ。五雜組ニ云、四月十五日、天下ノ僧尼、就^ニ禪刹^ニ搭挂ス。謂^ニ之ヲ結夏^ト、又謂^ニ之ヲ結制^ト、又安居ト名ク。

ここの注では、「予」が裏見の滝での句「暫時くハ……」の特に「夏」の解釈を施している。この句は「夏の初」で夏四月を表しているが、ここでは単に「夏(なつ)の初め」という意味ではなく、「夏(げ)」であり「結夏(けつげ)」の略で、僧が家に籠って修行することを示していると解説している。「結夏」は『日本国語大辞典 第二版』では、

〔げ〕は「夏」の呉音。夏安居(げあんご)の初めの日。陰曆で四月中旬のころ。結制。けちげ。とあり、陰曆四月中旬の行事ということになる。この結夏(夏)の用例として『五雜組』(引用書目にある)が挙げられている。この注の本文「四月十五日」結制は確かに『五雜組』卷二天部二にある。(12)

四月十五日に天下の僧や尼僧たちが、滞在を許された禅寺において錫杖を禅堂の搭鉤に掛けるこ

と、つまり修行をすること。それを結夏とか結制という。

という内容である。ここでは適切な用例の引用がなされていと思われる。

この注は、『鈔』には採られていない。一方『鼈頭本』では、

○しばらくは瀧にこもるや夏のはじめ、中七文字ニ籠るを云かけ、仏家ニ夏九句又夏安居冬安居など云、寂ニをる事也。

と出典は明記せず、句の「籠る」に着目し、さらにひと夏九十日間籠ることも、その間閑寂に過ごすことも加えられている。

(十六) 此馬のとまる所にて馬を返し給へとかし侍ぬ

馬ハ道をしるものなり。韓非子ニ云、齊ノ桓公伐^ニ孤竹^ヲ、春往^テ冬還^ル、迷惑^{シテ}失^レ道^ヲ。管仲^カ曰、老馬^ノ之智^可シ^レト^用ユ、乃^チ放^テ老馬^ヲ而隨^レ之^ニ、遂^ニ得^レ路^ヲ。

ここの注では、「予」が那須野越えの途中で、農夫

に馬を借りて進むことになった場面、農夫から言われた「馬に乗って、その馬が止まったところで、馬を返してください」との言葉に対する注釈を施している。まず、梨一は「馬は道を知るものである」と記したあとに、『韓非子』（引用書目にある）説林上の用例を挙げてゐる。この話は、

齊の桓公が孤竹君を伐った折、引き上げる時にはすでに冬で、出陣が春だったので様相が変わってしまひ道に迷つてしまふ。そこで管仲は「老馬が役に立ちます」と言つて、老馬を道案内に使つたところ、見事に進むべき道を探し当てた。

という内容で、ここでは老馬の能力を巧みに活用した管仲の優れた見知を賞賛しているのだが、梨一はこの話を挙げつつも、馬のすぐれた能力のことに限定しての用例としている。⁽¹³⁾ なお管仲が馬に助けられた話は『蒙求』に「管仲随馬」として掲載されているが、『菅菰抄』の引用書目には挙げられていない。

「予」は結果的に馬の案内によって、無事那須野越えが叶つたので、ここでは馬の能力の優秀性を示す必要があつたのである。

この注は、『鈔』には採られていない。一方『鼈頭本』では、

○馬ハ道をよくしるもの也。一たび往たる道わすれずと也。

○韓非子ニ云、齊ノ桓公伐孤竹、春往冬還、迷惑失道。管仲曰、老馬之智可用、乃放老馬而隨之、遂得路。

と『韓非子』も白文のままであるが、引用している。

(以下続く)

〔注〕

(1) 寛延四年刊『古文眞寶前集』による。句読点は筆者が加えたところがある。以下原文引用に関しては同様。

(2) 『笠間影印叢刊84 鼈頭奥之細道上・下』（笠間書院 昭和五十八年刊）による。なお読みやすくするため、適宜句読点・濁点を施した。以下同様。

『鼈頭本』の梅室の序文では、名作『奥の細道』には注釈が少ないが、その中で、

越前の梨一が著せし菅菰抄ハ、親自其地に到り周く趾跡を探り、虚実を糺したる物にしられバ、脱漏妄説の疑ひハあるべからず。をし
いかな本文断略ありて読むに自由ならず……

と示し、さらに『鼈頭本』の著者鶯宿も、

先に越府簑笠庵のぬしが、菅菰抄と題して本文を中略し悉く注解す。我又此解になづむに
あらず。原書といへども、元禄時代の事故、
古仮名ひらけずして其たがひも有べく、そを
あながちとがむにもあらず。書写のあしきも
あるべし。おのれ此記行に執心して、年月を
重ぬるうち細ミちくと歩行。書肆に見当り
かしこに絵まきありと聞きて磊落なるハ、は
ぶきよきは拾ひ、本文に並ばせ序にかなをも
たゞすに到り、訳にもれたるを補ひ、かしら
書きに標し鼈頭おくのほそミちと云。

と述べ、双方『菅菰抄』の価値を認めつつも、本文が注釈に該当する箇所のみで読みにくい点を指摘している。そして鶯宿自ら『菅菰抄』の補訂を試みた点も明らかにしている。『鼈頭本』がかな

り『菅菰抄』を意識して作られていたことがわかる。

(3) 元禄十一年刊『文選傍訓大全』巻八による。

(4) この詩は、『楽府詩集』(宋 郭茂倩) 卷七十四 雜曲歌辞十四・『古詩源』(清 沈德潛) 卷三 樂府歌辞にはあるが、本文に異同があり共に引用書目にはなく出典が不明である。ちなみにその詩句を挙げてみると、

枯魚過河泣 何時悔復及 作書与魴鱖 相教
慎出入

となっており、梨一が引用した二句のうち後半の一句の下三文字に違いが見られる。

(5) 寛永十四年刊『三體詩素隱鈔』による。他では転句の最後が「応頭白」になっており、梨一は『素隱鈔』を見ていた可能性もある。

(6) 享保十年刊『増註唐賢絶句三體詩法』による。

(7) 梨一の指摘は、禅則(『禅林句集』)の「笠重具天雪、履芳楚地花」の「具」のことを指しているようにも取れるが、この二句は明らかに対になっており、「具」と「楚」の関連から、「具」を「五」

の誤りと捉えることは不可能である。ここはやはり『おくのほそ道』本文の「呉」のことに対する言及だと考えざるを得ない。

の桓公の有能な二人の臣下の逸話が述べられている。

(8) 元禄十年刊『四書大全説約合参正解』による。

(9) 『和刻本諸子大成 第八輯』(汲古書院 昭和五十一年) 所収『淮南子鴻解』による。

(10) 『和刻本正史 漢書(一)』(汲古書院 昭和四十二年) による。

(11) 宝暦十一年刊『陶靖節集』(早稲田大学図書館 Waseda University Library) による。

(12) 『和刻本漢籍隨筆集1』(汲古書院 平成二十二年) 所収『五雜組』による。

(13) 『韓非子』では、その後、

山中で水が無くなった。すると管仲と同行していた隰明が「蟻は冬には山の南にいて、冬は山の北側にいます。高さ一寸ほどの蟻塚があれば、その下一切のところ、必ず水があります」と言ったので、そこを掘ると水が湧いてきた。

という展開になり、引用された話と合わせて、齊